

雪渡り

宮沢賢治

青空文庫

雪渡り その一（小狐の紺三郎）

雪がすつかり凍こおつて大理石よりも堅かたくなり、空も冷たい滑なめらかな青い石の板で出来てい
るらしいのです。

「堅かた雪ゆきかんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまつ白に燃えて百合の匂においを撒まきちらし又また雪をきらきら照ありました。
木なんかみんなザラメを掛かけたように霜しもでぴかぴかしています。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪ゆきぐつ沓くつをはいてキツクキツクキツク、野原に出ました。

こんな面おもしろ白しろい日が、またとあるでしょうか。いつもは歩けない黍きびの畑はたけの中でも、すす
きで一いっぱい杯ばいだった野原の上でも、すきな方かたへどこ迄までも行けるのです。平ひららかなことはまる
で一枚の板いです。そしてそれが沢た山さんの小さな小さな鏡かがみのようにキラキラキラキラ光るの
です。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

二人は森の近くまで来ました。大きな柏かしわの木は枝えだも埋うずまるくらい立派な透すきとおった氷つ柱しらを下くだげて重おもそうに身体からだを曲まげて居おりました。

「堅雪かたゆきかんこ、凍み雪こもりゆきしんこ。狐の子きつねのこあ、嫁よめいほしい、ほしい。」と二人は森へ向むかいて高く叫さけびました。

しばらくしいんとしましたので二人はも一度叫さけぼうとして息いきをのみこんだとき森の中なかから

「凍み雪こもりゆきしんしん、堅雪かたゆきかんかん。」と云いいながら、キシリキシリ雪ゆきをふんで白い狐きつねの子こがでて来きました。

四郎は少しぎよつとしてかん子をうしろにかばつて、しっかり足をふんばつて叫さけびました。

「狐きつねこんこん白狐しろきつね、お嫁よめいほしけりや、とつてやろよ。」

すると狐きつねがまだまるで小さいくせに銀ぎんの針はりのようなおひげをピンと一つひねつて云いいました。

「四郎しろうはしんこ、かん子かんこはかんこ、おらはお嫁よめいはいらないよ。」

四郎しろうが笑わらつて云いいました。

「狐こんこん、狐の子、お嫁がいらなきや餅もちやろか。」

すると狐の子も頭を二つ三つ振ふつて面白そうに云いました。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍の団子をおれやろか。」

かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたままそつと歌いました。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兎うさぎのくそ。」

すると小狐紺三郎が笑つて云いました。

「いいえ、決してそんなことはありません。あなた方のような立派なお方が兎うさぎの茶色の団子なんか召めしあがるもんですか。私たちは全体いままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をきせられていたのです。」

四郎がおどろいて尋たずねました。

「そいじやきつねが人をだますなんて偽うそかしら。」

紺三郎が熱心に云いました。

「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたという人は大抵たいていお酒に酔よつたり、臆おくびょう病びょうでくるくるしたりした人です。面白いですよ。甚兵衛じんべえさんがこの前、月夜の晩私わたしたちのお家の前まへに坐すわつて一晩じようるりをやりましたよ。私たちはみんな出て見たのです。」

四郎が叫びました。

「甚兵衛さんならじようるりじやないや。きつと浪花ぶしだぜ。」

子狐紺三郎はなるほどという顔をして、

「ええ、そうかもしれない。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちやんと私が畑を作つて播いて草をとつて刈つて叩いて粉にして練つてむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さしあげましょう。」

と四郎が笑つて、

「紺三郎さん、僕は丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。

この次におよばれしようか。」

子狐の紺三郎が嬉しがつてみじかい腕をばたばたして云いました。

「そうですか。そんなら今度幻燈会のときさしあげましょう。幻燈会にはきつといらつしやい。この次の雪の凍つた月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きましょう。何枚あげましょうか。」

「そんなら五枚お呉れ。」と四郎が云いました。

「五枚ですか。あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」と紺三郎が云いました。
 「兄さんたちだ。」と四郎が答えますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄ちいにいさんは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と四郎が云いました。

すると紺三郎は尤もつともらしく又おひげを一つひねって云いました。

「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。あなた方だけいらつしやい。特別席をとつて置きますから、面白いですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあなたの村の太右衛門たえもんさんと、清作さんがお酒をのんでとうとう目がくらんで野原にあるへんてこなおまんじゅうや、おそばを喰たべようとした所です。私も写真の中にうつっています。第二が『わなに注意せよ。』これは私共のこん兵衛べえが野原でわなにかかったのを画かいたのです。絵です。写真ではありません。第三が『火を軽べつすべからず。』これは私共のこん助があなたのお家うちへ行って尻尾しっぽを焼いた景色です。ぜひおいで下さい。」

二人は悦よろこんでうなずきました。

狐きつねは可笑おかしそうに口を曲げて、キックキックトントンキックキックトントンと足ぶみをはじめてしつぽと頭を振ってしばらく考えていました。がやっと思いついたらしく、両手を

振つて調子をとりながら歌いはじめました。

「凍^しみ雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはポツポツポ。

酔つてひよろひよろ太右衛門が、

去年、三十八、たべた。

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはホツホツホ。

酔つてひよろひよろ清作が、

去年十三ばいたべた。」

四郎もかん子もすつかり釣り込まれてもう狐と一^{いっしょ}緒に踊^{おど}っています。

キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、キツク、キ

ツク、トントントン。

四郎が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

かん子が歌いました。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取るとしておしりに火がつききやんきやんきやん。」

キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、トントン。キツク、キツク、キツク、キツク、キツク、キツク、トントン。

そして三人は踊りながらだんだん林の中にはいつて行きました。赤い封蝋細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピツカリピツカリと光り、林の中の雪には藍色の木影がいちめん網になつて落ちて日光のあたる所には銀の百合が咲いたように見えました。

すると子狐紺三郎が云いました。

「鹿の子もよびましょうか。鹿の子はそりや笛がうまいんですよ。」

四郎とかん子とは手を叩いてよろこびました。そこで三人は一緒に叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿の子あ嫁いほしいほしい。」

すると向うで、

「北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎」と細い声がありました。

狐の子の紺三郎がいかにもばかにしたように、口を尖らして云いました。

「あれは鹿の子です。あいつは臆病ですからとてもこつちへ来そうにありません。けれどもう一遍いっぺん叫んでみましょうか。」

そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、しかの子あ嫁よめいほしい、ほしい。」

すると今度はずうつと遠くで風の音が笛の声か、又は鹿の子の歌かこんなように聞えませんでした。

「北風びいびい、かんこかんこ

西風どうどう、どつこどつこ。」

狐きつねが又ひげをひねって云いました。

「雪が柔やわらかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍ったらきつとおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌いながら銀の雪を渡っておうちへ帰りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

雪渡り ゆきわた その二（狐小学校の幻燈会）

青白い大きな十五夜のお月様がしずかに氷の上 ひ かみやま から登りました。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒水石 かんすいせき のように堅く凍りました。

四郎は狐の紺三郎との約束 やくそく を思い出して妹のかん子にそつと云いました。

「今夜狐の幻燈会なんだね。行こうか。」

するとかん子は、

「行きましょう。行きましょう。狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」とはねあがつて高く叫んでしまいました。

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のところへ遊びに行くのかい。僕も行きたいな。」と云いました。

四郎は困ってしまつて肩 かた をすくめて云いました。

「大兄さん。だつて、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」

二郎が云いました。

「どれ、ちよつとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして十二歳以上の来賓 らいひん は入

場をお断わり申し候、狐なんて仲々うまくやってるね。僕はいけないんだね。仕方ないや。お前たち行くんならお餅を持って行っておやりよ。そら、この鏡餅がいいだろう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪沓をはいてお餅をかついで外に出ました。

兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並んで立つて、

「行っておいで。大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。そら僕ら嘸してやろうか。堅雪かんこ、凍み雪しんこ、狐の子あ嫁いほしいほしい。」と叫びました。

お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれています。二人はもうその森の入口に来ました。

すると胸にどんぐりのきしきしやうをつけた白い小さな狐の子が立つて居て云いました。

「今晚は。お早うございます。入場券はお持ちですか。」

「持っています。」二人はそれを出しました。

「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が尤もらしくからだを曲げて眼をパチパチしながら林の奥を手で教えました。

林の中には月の光が青い棒を何本も斜めに投げ込んだように射して居りました。その中のあき地に二人は来ました。

見るともう狐の学校生徒が沢山集つて栗の皮をぶつつけ合つたりすもうをとつたり殊におかしいのは小さな小さな鼠位の狐の子が大きな子供の狐の肩車に乗つてお星様を取ろうとしているのです。

みんなの前の木の枝に白い一枚の敷布がさがっていました。

不意にうしろで

「今晚は、よくおいででした。先日は失礼いたしました。」という声がしますので四郎とかん子とはびつくりして振り向いて見ると紺三郎です。

紺三郎なんかまるで立派な燕尾服を着て水仙の花を胸につけてまっ白なはんけちでしきりにその尖つたお口を拭いているのです。

四郎は一寸お辞儀をして云いました。

「この間は失敬。それから今晚はありがとう。このお餅をみなさんであがって下さい。」
狐の学校生徒はみんなこつちを見えています。

紺三郎は胸を一杯に張つてすまして餅を受け取りました。

「これはどうもおみやげを戴いて済みません。どうかごゆるりとなすって下さい。もうすぐ幻燈もはじまります。私は一寸失礼いたします。」

紺三郎はお餅を持って向うへ行きました。

狐の学校生徒は声をそろえて叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、硬いお餅はかつたらこ、白いお餅はべつたらこ。」

幕の横に、

「寄贈、お餅沢山、人の四郎氏、人のかん子氏」と大きな札が出ました。狐の生徒は悦んで手をパチパチ叩きました。

その時ピーと笛が鳴りました。

紺三郎がエヘンエヘンとせきばらいをしながら幕の横から出て来て丁寧にお辞儀をしました。みんなはしんとなりました。

「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠のお皿です。お星さまは野原の露がキラキラ固まったようです。さて只今から幻燈会をやります。みなさんは瞬やくしやみをしなないで目をまんまろに開いて見ていて下さい。

それから今夜は大切な二人のお客さまがありますからどなたも静かにしないでいけません。決してそっちの方へ栗の皮を投げたりしてはなりません。開会の辞です。」

みんな悦んでパチパチ手を叩きました。そして四郎がかん子にそっと云いました。

「紺三郎さんはうまいんだね。」

笛がピーと鳴りました。

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔よった人間のおじいさんが何かおかしな円いものをつかんでいる景色です。

みんなは足ぶみをして歌いました。

キックキックトントンキックキックトントン

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはほっほっほ

酔たえもんってひよろひよろたえもん太右衛門が

去年、三十八たべた。

キックキックキックキックトントン

写真が消えました。四郎はそつとかん子に云いました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者がほおの木の葉でこしらえたおわん椀

のようなものに顔をつつ込んで何か喰べています。紺三郎が白い袴はかまをはいて向うで見ているけしきです。

みんなは足踏あしぶみをして歌いました。

キツクキツクトン、キツクキツク、トン、

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはほっほっほ、

酔つてひよろひよろ清作が

去年十三ばい喰べた。

キツク、キツク、キツク、キツク、トン、トン、トン、

写真が消えて一寸ちよつとやすみになりました。

可愛かあいらしい狐の女の子が黍きびだんご団子をのせたお皿を二つ持って来ました。

四郎はすっかり弱つてしまいました。なぜつてたった今太右衛門と清作との悪いものを知らないで喰べたのを見ているのですから。

それに狐の学校生徒がみんなこつちを向いて「食うだろうか。ね。食うだろうか。」なんてひそひそ話し合っているのです。かん子ははずかしくてお皿を手に持ったまま真っ赤

になつてしまいました。すると四郎が決心して云いました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕は紺三郎さんが僕らを欺すなんて思わないよ。」そして二人は黍団子をみんな喰べました。そのおいしいことは頬つぺたも落ちそうです。狐の学校生徒はもうあんまり悦んでみんな踊りあがつてしまいました。

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、

たとえからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云うな。」

キツク、キツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえここへ倒れても

狐の生徒はぬすまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉^{うれ}しくて涙^{なみだ}がこぼれました。

笛がピーとなりました。

『わなを軽べつすべからず』と大きな字がうつりそれが消えて絵がうつりました。狐のこ
ん兵衛^{べえ}がわなに左足をとられた景色です。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が

左の足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

とみんなが歌いました。

四郎がそつとかん子に云いました。

「僕の作った歌だねい。」

絵が消えて『火を軽べつすべからず』という字があらわれました。それも消えて絵がうつりました。狐のこん助が焼いたお魚を取ろうとしてしっぽに火がついた所です。

狐の生徒がみな叫びました。

「狐こんこん狐の子。去年狐のこん助が

焼いた魚を取るとしておしりに火がつき

きやんきやんきやん。」

笛がピーと鳴り幕は明るくなって紺三郎が又出て来て云いました。

「みなさん。今晚の幻燈はこれでおしまいです。今夜みなさんは深く心に留めなければならぬことがあります。それは狐のこしらえたものを賢いすこしも酔わない人間のお子さんが喰べて下すつたという事です。そこでみなさんはこれからも、大人になってもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄いままでの悪い評判をすっかり無くしてしまうだろうと思いません。閉会の辞です。」

狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーツと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、丁寧におじぎをして云いました。

「それでは。さようなら。今夜のご恩は決して忘れません。」

二人もおじぎをしてうちの方へ帰りました。狐の生徒たちが追いかけて来て二人のふところやかくしにどんぐりだの栗だの青びかりの石だのを入れて、

「そら、あげますよ。」「そら、取って下さい。」なんて云って風のように逃げ帰って行きます。

紺三郎は笑って見ていました。

二人は森を出て野原に行きました。

その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影^{かげ}が向うから来るのを見ました。それは迎^{むか}いに来た兄さん達でした。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「愛国婦人」

1921（大正10）年12月号、1922（大正11）年1月号

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2006年3月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪渡り

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>